

国際文化交流特論

張小鋼

● 講義概要

古代の中国人は書物に対し異常なほど愛する一方、恐れていた。歴代王朝の支配者たちは権力により書物を焼いたり、集めたり、整理したりすることを繰り返していた。このような異様な光景は世界の文化史においても類を見ない出来事である。この講義は中国人と書物との関係から、中国の文化史を紹介しながらその性格を分析する。

● 学修到達目標

この授業を通じて、中国文化の深層への認識を深めてほしい。さらに、日中文化の比較研究の視点により、その異同を明らかにする。

● 講義計画

- 第 1 回 アンケート「あなたは本が好きですか？」。
そのアンケートの結果を分析しながら、この授業の進め方を説明する。
- 第 2 回 書物の成立について。
- 第 3 回 序章：張良の話。
- 第 4 回 第一章「読書」。課題 1：日本における読書
- 第 5 回 第二章「焚書」。課題 2：日本における焚書
- 第 6 回 第三章「集書」。課題 3：日本における集書
- 第 7 回 第四章「校書」。課題 4：日本における校書
- 第 8 回 第五章「注釈」。課題 5：日本における注釈
- 第 9 回 第六章「句読」。課題 6：日本における句読
- 第 10 回 第七章「刻書」。課題 7：日本における刻書
- 第 11 回 第八章「偽書」。課題 8：日本における偽書
- 第 12 回 第九章「蔵書」。課題 9：日本における蔵書
- 第 13 回 第十章「余話」
- 第 14 回 終章：中国文化の特質。
- 第 15 回 日中における書物文化の比較。レポート提出。

● 事前事後学習

- ① 事前に配布した資料を予習すること。
- ② 分担した課題を事前に準備すること。

● テキスト

『中国人と書物』（張小鋼著、あるむ出版、2005 年）

● 参考資料

その都度配布する。

● 学習評価方法

- ① 積極的に授業に参加すること。(平常点 10%)
- ② 課題発表。約 200 字程度。(30%)
- ③ レポート提出。2000 文字(400 字詰め原稿用紙 5 枚)程度。(60%)

国際関係特論

増田 あゆみ

● 講義概要

本研究は、国際関係を、国際関係論のパラダイム(範例)に沿って、見ていくことによって、20世紀初頭の国際関係から現在の国際関係がどのように変化してきたのかを分析していこうとするものである。

20世紀初頭の国際関係論パラダイムは、列強国を行動主体(アクター)として承認した軍事力と帝国主義を重視した西欧国際体系であった。第二次世界大戦後は、米ソを中心とする東西冷戦の思考軸がパラダイムになり、1960年代からは、南北問題と国際的相互依存が、国際関係論のパラダイムに加わった。さらに地球環境問題も加わり、国際関係は、国際間関係、トランスナショナルな関係、超国家的機能による3層部から構成されるものとなった。伝統的な国家間関係にくわえ、ヒューマン・イシューとグローバル・イシューが、国際関係のパラダイムの一部を構成するようになってきたのである。

本講義においては、従来の伝統的国際関係のパラダイムの確認も行いながら、この新しいパラダイムのヒューマン・イシュー(人権論、ジェンダー、子ども、健康、エスニシティ)とグローバル・イシュー(国際連合、グローバル・ガバナンス、地域統合、多文化主義、情報ネットワーク、地球環境問題)を中心に、現在の国際関係を見ていきたい。なお、各イシューにおいては、一般的解説、および具体的な事象による事例研究を含み、問題提起を行いながらの分析を進めていきたい。

● 学修到達目標

国際関係論および国際政治学の基礎を固めることが目標となる。

国際関係論および政治での物事の構造、国家間、社会間の関係を、基本的な理論に基づいてみるができるようになることを本講義の到達目標とする。

● 講義計画

- 第1回 国際関係のパラダイム(範例)とは
- 第2回 国家間関係、国家安全保障
- 第3回 外交、戦争
- 第4回 植民地支配
- 第5回 人権
- 第6回 ジェンダー、子ども
- 第7回 人間の安全保障
- 第8回 エスニシティ
- 第9回 国際組織
- 第10回 グローバリゼーション
- 第11回 地域統合
- 第12回 多文化主義
- 第13回 情報ネットワーク
- 第14回 地球環境
- 第15回 新しい国際関係の分析に向けて

● 事前事後学習

事前学習においては、テキストを読んで、疑問・質問事項をまとめておくこと。

事後学習においては、疑問・質問事項の回答をまとめて、レポート課題にして提出すること。

● テキスト

初瀬龍平、定形衛、月村太郎編『国際関係論のパラダイム』(有信堂)2001年

● 参考資料

テキストの中に明記。

● 成績評価方法

課題レポート報告:50%、出席:50%

● **その他留意事項**

講義中の議論に備えて、事前学習を十分に行うこと。

文化マネジメント特論

柴崎全弘

●講義概要

外国人が日本に興味をもつようになったきっかけは時代と共に変化しており、昔は日本の文学・歴史・宗教・社会・経済などが主であったが、90年代後半からは日本のポップカルチャーを挙げる人が増えてきている。また2010年代からはクールジャパンの掛け声のもとに、日本のマンガ・アニメ・ゲーム等を海外に売り込む戦略が練られるようになってきている。

この講義では、日本のポップカルチャーについての理解を深めつつ、日本の魅力を世界に発信する方法論について考えていく。

この講義は、本学のディプロマ・ポリシー【知識・技能】のうち「日本および世界の各地域の文化・歴史・社会・政治・経済などを学び、グローバル社会における多文化理解を身に付ける」ことを主な目的とする。

●学修到達目標

日本のポップカルチャーやクールジャパン戦略についての理解を深め、その特徴や魅力を簡潔に説明できるようになる。

●講義計画

- 第1回 世界からみた日本の魅力とは
- 第2回 海外映画に描かれる日本のイメージ
- 第3回 日本の「おもてなし」文化
- 第4回 日本のポップカルチャー
- 第5回 クールジャパンとは何なのか
- 第6回 「クール・コリア戦略」に学ぶ国主導の文化政策
- 第7回 アイドルに未熟さを求める日本と完璧さを求める韓国
- 第8回 日本の推し活文化とその経済効果
- 第9回 なぜ J-POP や J-ROCK は海外では通用しないのか
- 第10回 「萌えキャラ」と「ゆるキャラ」：カワイイの基準は世界共通か
- 第11回 日本のゲーム史：パックマンからポケモンまで
- 第12回 マンガの主人公像と時代的背景との関係性
- 第13回 日本アニメの特徴と海外進出
- 第14回 なぜ今、昭和レトロがブームになっているのか
- 第15回 これからの日本は何を売りにすればよいのか

●事前事後学習

講義前にレジュメを読み込み、ディスカッションに備える。講義後は感想や疑問点をノートにまとめておく。

●テキスト

毎回レジュメを配布する。

●参考資料

授業内で適宜紹介する。

●成績評価方法

平常点 50%＋期末レポート 50%

NGO・NPO特論

田浦 健朗

● 講義概要

地球規模の環境問題である気候変動・地球温暖化が極めて深刻になり、「気候危機」という認識も広がっている。この危機に対して世界各地で社会・経済、産業構造やエネルギーに関する変革が起こっている。この講義では、気候危機問題に焦点をあて、解決に向けた重要なセクター・組織であるNGO・NPOについて学び、克服のための方策について考えることを目的とする。世界全体では、人口増加、貧困と格差問題、紛争、難民などが深刻な課題があり、持続可能な社会への転換が模索されている。気候変動問題に関しては、「パリ協定」が2016年11月に発効し、脱炭素と再生可能エネルギー100%に向けて継続して転換している。2023年に開催されたCOP28では、「化石燃料からの脱却」が合意され、世界が新しい方向に向かうことになってきた。国内では、人口減少・高齢化が進みつつある状況で、脱炭素社会に向けた新しい社会・経済制度の構築、産業構造・生活様式の転換が必要である。「2050年カーボンニュートラル宣言」が2020年10月だされたが、その実現に向けた課題も多い。これらの課題解決に向けて、国際社会、国レベル、地域レベルの地球温暖化防止のための政策や制度、そして地球温暖化防止に取り組んでいるNGO・NPOの現状を把握し、その使命や役割、課題について学び、議論する。講義は隔週になるので、各回のテーマに関する基礎知識を共有し、報告・ディスカッションを行う。

● 学修到達目標

NGO・NPOの視点・ビジョン・使命を理解し、現実社会の課題を発見・分析し、課題解決のための基礎的な能力を獲得すること。日本国内の公共政策・社会制度とNGO・NPOに関する理解の深化と、国際的な比較による社会的課題を整理する能力を獲得すること。

● 講義計画

- 第1回 オリエンテーション、NGO・NPOとは
- 第2回 気候変動・地球温暖化問題について
- 第3回 気候変動に関する国際交渉におけるNGO・NPO
- 第4回 気候変動対策に関する国際動向
- 第5回 エネルギー問題、再生可能エネルギーとNGO・NPO
- 第6回 再生可能エネルギー普及事例
- 第7回 地域貢献型新電力と中間支援組織
- 第8回 脱炭素地域づくりとNGO・NPO
- 第9回 地域の課題・活性化とNGO・NPO
- 第10回 国内の気候変動政策とNGO・NPO
- 第11回 家庭・オフィスの気候変動対策とNGO・NPO
- 第12回 パートナーシップとネットワーク
- 第13回 ユース世代・気候正義
- 第14回 NGO・NPOの役割・課題
- 第15回 NGO・NPOの今後の展望、まとめとレポート提出

● 事前事後学習

事前には参考文献を参照し、事後にはレビューと次週までの課題について調査する。

● テキスト

平尾剛之・内田香奈編著『京都発NPO最善戦』京都新聞出版センター、2018

● 参考資料

和田武著『気候危機打開と社会変革』新日本出版社、2025
 一般社団法人ローカルグッド創成支援機構編著『エネルギーで地域を元気にする仕事』学芸出版社、2025
 池内了著『これからの社会を考えるための科学講義』青土社、2025
 的場信敬・平岡俊一編『脱炭素地域づくりを支える人材』日本評論社、2025
 安田陽著『2050年再エネ9割の未来』山と溪谷社、2025
 宮垣元著『NPOとは何か』中公新書、2024
 東京大学気候と社会連携研究機構編『気候変動と社会』東京大学出版会、2024
 西岡秀三他編著『まっとうな気候政策へ』地平社、2024
 諸富徹著『税という社会の仕組み』ちくまぷりまー新書、2024
 坂本治也編著『日本の寄付を科学する』明石書店、2023
 クライメイト・リアリティ・プロジェクト・ジャパン編『気候変動を学ぼう』合同出版、2023
 櫻田彩子著『私はエコアナウンサー』本の泉社、2023
 共生エネルギー社会実装研究所編著『脱炭素の論点』旬報社、2023
 日本経済新聞社編『第4の革命カーボンゼロ』日本経済新聞出版、2023
 カーボン・アルマナック・ネットワーク編『カーボン・アルマナック』日経ナショナルジオグラフィック、2022
 グレタ・トゥーンベリ編著『気候変動と環境危機』河出書房新社、2022
 岸本聡子『私がつかんだコモンと民主主義』晶文社、2022
 三上直之『気候民主主義』岩波書店、2022
 堀内都喜子『フィンランド幸せのメソッド』集英社新書、2022
 NIKKEI Financial 編『ESGの奔流』日本経済新聞社、2022
 他

● 成績評価方法

課題の提出・報告と議論への参加(60%)。最終レポート(40%)。

● その他留意事項

講義計画は、変更する場合がある。

現代欧米文化・社会特論

C. M. メイヨー

● Course Overview 講義概要

本講義では、現代の欧米文化と社会の動向を把握し、その変遷を歴史学の視点から理解できるようにすることを目的とする。受講者には、社会で起きている出来事に問題意識をもちつつ、自身の専攻との関連を探りながら主体的に学習することを期待する。学習内容と自分の専門分野に関連するテーマを各自で選定し、最終課題としてまとめてもらう。

本講義は、国際文化協力専攻ディプロマ・ポリシーのうち、「国際文化学の理論と応用に精通し、学術的な研究能力と論文作成能力を身につけている」に関連した科目である。また、カリキュラム・ポリシーの「国際協力、国際交流、国際関係に関する深い知識と教養を身につけるための国際文化協力領域」科目に該当する。

● Learning Objectives 学習到達目標

現代欧米文化と社会に関する史料および先行研究を踏まえつつ資料を読み解き、適切な分析を通して妥当な結論に到達し、論理的な構成を具えた論文としてまとめ上げる力を養うことを目標とする。

● Lecture Plan 講義計画

1. オリエンテーション(講義の目的・到達目標・最終課題の進め方)
2. 啓蒙思想の発展と「宗教」
3. 欧米文化と社会を読む視点
4. 20世紀前半の欧米社会:第一次世界大戦と大衆社会の形成
5. 第二次世界大戦と戦後欧米の再編
6. 冷戦期の欧米文化と社会
7. 冷戦終結とグローバル化
8. 価値観対立と政治の変容
9. 情報化・デジタル化と社会
10. 安全保障と社会の接点
11. 欧米と地域統合の論理
12. 欧米から見た国際協力と文化交流
13. 市民社会と非国家アクター
14. 「公」と「私」の境界の変化
15. 最終課題発表(各自のテーマ報告)、全講義の振り返り(レポート提出)

● Class Preparation and Review 事前事後学習

・事前学習として、オンラインで配布する授業用スライドに目を通し、疑問点や自分なりの見解を整理したうえで授業に臨むこと。また、授業内容に関連する最新ニュースに日頃から触れる習慣をつけること。(所要時間 15 分程度)

・事後学習として、毎回の講義終了後、忘れないうちに授業の流れや要点を再現できるよう、講義ノートを整理事ること。(所要時間 15 分程度)

● Textbook テキスト

教科書は指定しない。

● Reference Materials 参考資料

必要に応じて授業時に適宜紹介したり、配布したりする。

● Other Notes その他留意事項

- ・授業は日本語で行われる。
- ・本講義はアクティブ・ラーニング(院生参加型)形式で進められるため、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションを取り入れながら学びを深めていく。
- ・受講にあたって、必ず配布物とノートを用意すること。授業中は要点を整理しながらノートを取り、次回の授業に備えて予習と復習を行うこと。
- ・すべての授業に遅刻せず出席することが求められる。
- ・毎回リアクションペーパーの提出を求め、提出されたリアクションペーパーに対するフィードバックは次回の授業時に行う。

● Evaluation Method 評価方法

講義時の平常点(講義中のリアクションペーパー、質疑応答、ディスカッション、プレゼンテーション等)(50%) + 最終レポート(50%)にて評価する。

国際機構特論(国際情勢の変化における多国間機構の役割)

中野 有

● 講義概要

本講義は、国連を中心とする国際機構(多国間機構)が、激動する国際情勢の中で何を担い、どこに限界があり、どう活かせるのかを、理論と実務の両面から学ぶ授業です。

ウクライナ情勢、中東の緊張、北朝鮮問題、各国選挙による政治変動、さらに生成 AI の急速な進展や気候変動など、世界は複数の課題が同時進行する「複合危機」の時代に入っています。こうした状況で、国家同士の対立だけでなく、国際協力の設計図(ルール・制度・交渉・現場運用)を理解することは、外交・安全保障分野はもちろん、ビジネスやメディア、国際キャリアを志す学生にとっても大きな武器になります。

講義は、講師の20年以上にわたる海外フィールド経験(中東・豪州・アフリカ・欧州・米国)と、国連機関(UNIDO)やシンクタンク(ブルッキングス研究所、東西センター等)での知見を踏まえつつ、できるだけ分かりやすく進めます。

授業は一方的な講義に偏らず、ニュース分析・討論・ケーススタディ・プレゼンなどを取り入れたアクティブラーニングで、「知識を覚える」から「自分の言葉で考え、提案できる」へと引き上げます。

講義の達成目標は、国連機構を基軸とする平和構築の探求にある。講師の20年以上の中東、オーストラリア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの海外駐在のフィールド経験、加えてウィーンに本部のある国連工業開発機構や世界のトップクラスのシンクタンクであるブルッキングス研究所、東西センターや開発コンサルタントの多角的な経験をベースに、単なるアカデミズムの探究のみならず、実践的であり、現在進行形の地政学的研究を通じ世界の潮流を把握するのに役立つ講義を行う。

● 学修到達目標

- ・国際情勢の変化を、多角的・重層的な視点で読み解く力を身につける
- ・現在進行形の国際課題に触れながら、国際機構の役割と限界を説明できるようになる
- ・受け身ではなく、自分の頭で考え、国際協力に関するビジョン(提案)を形成できるようになる●

講義計画

- 第1回 ガイダンス(授業の進め方／評価／国際機構を学ぶ意味)
- 第2回 国際機構の諸理論(制度・集団安全保障・ガバナンス等)
- 第3回 グローバル・イングリッシュ(国際協議の基礎表現・読み方)
- 第4回 リベラルアーツと哲学的考察(国際協力を支える価値観)
- 第5回 国連と開発(アフリカ・途上国開発の現場と論点)
- 第6回 地球環境問題／エネルギー安全保障／食料安全保障
- 第7回 国連外交: 予防外交・人間の安全保障・ソフト/スマートパワー
- 第8回 米国のシンクタンクと多国間外交(政策が生まれる場所)
- 第9回 日本と国連外交(日本の立ち位置と戦略)
- 第10回 国際機構の基礎理論の「自分なりの整理」(枠組み化)
- 第11回 ケーススタディ(国連の成功・失敗を検討)
- 第12回 ケーススタディ(同上)
- 第13回 ケーススタディ(同上)
- 第14回 総括(学びの統合／最終プレゼン準備)

第 15 回 総括(最終プレゼン・振り返り)

● 事前事後学習

国際情勢を観察する習慣をつくるため、以下を継続します。

- ・新聞(朝日・読売・日経・毎日・産経・NYT 等)の社説を週に 1～2 本読む
- ・CNN / BBC などの国際ニュースを週に 1～2 本視聴し、要点をメモする

※「量」より「継続」と「要点整理」を重視します。

● テキスト

国際関係・国際機構に関する文献のエッセンス資料を約 30 本配布します(授業内で活用)。

● 参考資料

ガイダンスにて紹介します。

● 成績評価方法

・平常点 50%

・プレゼンテーション 50%

平常点は、授業への参加姿勢(討論・発言)、小さなアウトプット(要点メモ等)を総合的に評価します。

● その他留意事項

受け身ではなく、自分の頭で考え、文献とニュースに触れ、積極的に発信する力を鍛える授業です。

「国際情勢を語れるようになりたい」「国連や国際協力に関心がある」「将来の進路(ビジネス／行政／メディア／国際分野)に強い土台を作りたい」学生を歓迎します。

アジア中国社会文化特論

顧 令儀

● 講義概要 (Course Description)

中国社会を考察する際に、中央と地方の関係は一つの重要な課題である。本授業は「妖術」という社会的事件に対する清王朝政府の対応を通して、中央政府、地方官僚と民衆の認識と行動及び複雑な関係を考察することで、近代中国社会における政治、文化、権力構造等を総合的に理解し、歴史的アプローチ方をマスターすることを目的とします。

講義は、関係文献を読み、発表し、討論する形で行います。初回の授業で、メンバーの状況を確認した上で進め方を決めます。

● 学修到達目標 (Main Goals)

近代中国社会文化についての知識を身につける。

中国社会の政治、文化、権力構造についての認識を深めている。

中国社会文化を考察する際に、複数の側面から、より広い視野を持って分析できる。

● 講義計画 (Course Schedule)

- 第一回 オリエンテーション・講義の進め方
- 第二回 乾隆期の「妖術」事件
- 第三回 乾隆期の社会・政治背景
- 第四回 中国文化における「魂」とは
- 第五回 「魂」への民間信仰
- 第六回 地方社会での恐慌の蔓延と社会秩序の崩壊
- 第七回 地方官僚の対応
- 第八回 中央政府の対応
- 第九回 乾隆帝の見え隠れの「敵」
- 第十回 乾隆期の外来人口に対する認識
- 第十一回 清王朝地方統治の特徴と課題
- 第十二回 「妖術」事件の終結
- 第十三回 官僚体系での清算
- 第十四回 「妖術」事件に対する異なる階層の認識
- 第十五回 まとめ：乾隆期「官僚君主制」の実態と矛盾

● 事前事後学習 (Preparation and Review)

講義の予習と復習は、授業の倍から二倍の時間が必要です。

講義の前に教材(プリント配布)を読んでおき、内容について自分の考えをまとめてから講義に臨んでください。講義終了後、示された課題について調べ、考えをまとめてください。

● テキスト (Required Textbooks)

初回の授業でプリントを配布します。

● 参考資料 (References)

Philip A. Kuhn(孔飛力), 1990, 『叫魂:1768 年中国妖術大恐慌』, 陳兼訳, 三聯書店, 2014 年。

費孝通, 1948, 『郷土中国』西澤 治彦訳, 風響社, 2019 年。

上記以外に、授業中に指定するものもあります。

● 成績評価方法 (Evaluation)

授業参加(50%)

課題レポート(25%)

事前事後学習(25%)

● **その他留意事項(Other Matters)**

講義では積極的に思索し、発言してください。欠席はしないこと。

国際移民特論

増田 あゆみ

● 講義概要(目的と内容・方法)

本講義では、国際移民を、政治学的にとらえる。つまり、移民の社会における位置を考察し、その問題点を分析し、解決策を政策分析及び社会の中の権力関係に注目して考察を促すものである。

対象とする社会は移民国家アメリカ、オーストラリアおよび、各国に散住した人々の子孫(ディアスポラ)の華僑及び日系社会である。これらの社会での分析と考察が、日本社会の多文化・多民族化においてどのような視座を示すのかを考える。

● 学修到達目標

国際移民によってみられる様々な現象を分析し、多様な民族および文化を持つ人々が存在する社会の理解を、政治的、つまり、社会の権力関係において考察することができることを目指すものとする。

● 講義計画

- 第1週 移民とは？アメリカ、オーストラリア、華僑、日系人、日本社会について
- 第2週 移民社会:アメリカ
- 第3週 アメリカに関するビデオの視聴
- 第4週 移民社会:オーストラリア
- 第5週 オーストラリアに関するビデオの視聴
- 第6週 移民社会アメリカとオーストラリアの比較と考察による議論
- 第7週 国際移民;華僑
- 第8週 華僑に関するビデオの視聴
- 第9週 国際移民:日系人
- 第10週 日系人に関するビデオの視聴
- 第11週 華僑と日系人の比較と考察による議論
- 第12週 日本社会における多民族・多文化性について;歴史と現在
- 第13週 日本社会の民族的多様性に関するビデオの視聴①
- 第14週 上記①についての議論
- 第15週 まとめ

● 事前事後学習

授業内容の復習と議論に備えた用意をすること

● テキスト

なし、パワーポイントによる教材の提示を行う

● 参考資料

● 成績評価方法

議論への参加、発表、レポートの評価

● その他留意事項

国際文化特論

張 勤

● 講義概要(目的と内容・方法)(Course Description: Purpose, Content and Method)

グローバルが進むこんにちにおいて、社会構成員の行動様式と生活様式を規制するそれぞれの社会の固有文化は、地域や国の境界を超えて、お互いに干渉し合い、共存する方向へと進んでいます。国際的な視野から、民族、宗教、移民、言語などに関わる文化事象を観察する際に、異文化共存の視点も極めて重要なものとなります。

この講義は、このような視点から、特に言語に関わる文化事象として翻訳を取り上げ、翻訳の実際と可能性を通して、異文化共存のあり方について考えていき、そこに存在する問題を把握し、認識を深めることを目的とします。

講義は、全員で関係論文を読み、履修者分担で論点の分析と見解を発表し、全員でディスカッションを行う、という形で行います。初回の講義で、メンバーの状況を確認した上で、スケジュールを決めます。

● 学修到達目標(Aim of This Course)

グローバル化が進む中、異なる文化が如何に干渉し合うことについて認識を深めている。

異文化コミュニケーションの可能性と問題点について理解を深めている。

異文化コミュニケーションにおける翻訳の可能性と問題点について理解を深めている。

● 講義計画(Course Schedule)

第1回(第1週) オリエンテーション・講義の進め方・スケジュール

第2回(第1週) 翻訳の国際文化的な側面

第3回(第2週) (論文研究) 文学翻訳における言語の問題について(1)

第4回(第2週) (論文研究) 文学翻訳における言語の問題について(2)

第5回(第3週) (論文研究) 文学作品の翻訳に見る異文化伝達法(1)

第6回(第3週) (論文研究) 文学作品の翻訳に見る異文化伝達法(2)

第7回(第4週) (論文研究) コーパスに見る翻訳における「明示化」の特徴(1)

第8回(第4週) (論文研究) コーパスに見る翻訳における「明示化」の特徴(2)

第9回(第5週) (論文研究) 相互行為としてのメディア翻訳(1)

第10回(第5週) (論文研究) 相互行為としてのメディア翻訳(2)

第11回(第6週) (論文研究) テーマ発表(1)

第12回(第6週) (論文研究) テーマ発表(2)

第13回(第7週) (論文研究) テーマ発表(3)

第14回(第7週) (論文研究) テーマ発表(4)

第15回(第8週) ディスカッション・まとめ

● 事前事後学習(Preparation & Review)

講義の予習と復習は、授業の二倍の時間が必要です。

講義の前に論文を読んでおき、内容について自分の考えをまとめてから講義に臨んでください。

講義終了後、示された課題について調べ、考えをまとめてください。

● テキスト(Required Textbooks)

初回の講義で論文のプリントを配布します。

● 参考資料(References)

明石元子・Hadley James 著名翻訳家・テキスト分析・可視性概念―村上春樹にみる同化・異化論の進展―『通訳翻訳研究』14.

篠原有子 本映画の英語字幕における訳出要因について―制作プロセスと視聴者に着目して『通訳翻訳研究』14.

新崎隆子・石黒弓美子 日本語発話の解釈:CMM 理論の日英通訳指導への応用『通訳翻訳研究』12.

平子義雄 翻訳の原理―異文化をどう訳すか、大衆館書店.

古川弘子 女ことばと翻訳『通訳翻訳研究』13.

牧野成一 日本語を翻訳すること―失われるもの、残るもの(中公新書).

矢田陽子 言語表象文化と翻訳 ―『たそがれ清兵衛』英語・スペイン語映像翻訳の記号学的考察―『メディア・英語・コミュニケーション』3 巻 1 号.

山本一晴 多文化共生施策における行政情報の多言語化『通訳翻訳研究』11.

山本史郎 翻訳の授業 東京大学最終講義(朝日新書).

● 成績評価方法(Course Evaluation Methods)

論文研究発表・講義参加(50%)

期末課題レポート(25%)

事前事後学習(25%)

● その他留意事項(Other Matters)

講義では積極的に思索し、発言してください。欠席はしないこと。

日本文化特論

鹿毛 敏夫

● 講義概要

日本の文化は、周辺のアジア諸国・諸地域との接触のなかで育まれてきた。日本と日本人の歴史文化を考えるうえでアジアとの交流と相互影響の考察は欠かせない視点であり、現代の複雑な国際関係を理解するためにも、過去のアジア交流についての正確な理解が必要である。本講義では、前近代における日本とアジア諸国・諸地域との文化交流の歴史を東アジアから東南アジアにまたがる環シナ海文化圏の広がりの中で考察・理解する。

● 学修到達目標

前近代における日本とアジア諸国・諸地域との文化交流の歴史を理解し、アジア世界における日本文化の位置づけを史的背景のもとに考察・説明することができる。

● 講義計画

- 第1回 日本文化と唐・宋・元
- 第2回 室町文化と中華
- 第3回 日明関係
- 第4回 守護大名の遣明船派遣
- 第5回 遣明船と倭寇
- 第6回 遣明船は何を運んだか
- 第7回 九州産硫黄の爆売り
- 第8回 硫黄産地の社会構造
- 第9回 「サルファーラッシュ」から「シルバーラッシュ」へ
- 第10回 渡来「唐人」の活動
- 第11回 「唐人」仏師と豊臣政権
- 第12回 中世社会の唐人文化
- 第13回 九州大名の東南アジア外交
- 第14回 南蛮文化
- 第15回 アジアのなかの日本文化

● 事前事後学習

各回での学習事項を復習し、次回のテーマについてテキストを読んで予習をしてくること。発表者はプレゼンテーション資料を適切にまとめること。

● テキスト

鹿毛敏夫著『アジアのなかの戦国大名―西国の群雄と経営戦略―』吉川弘文館、2015

● 参考資料

- 羽田正著『新しい世界史へー地球市民のための構想―』岩波書店、2011
- 村井章介著『増補中世日本の内と外』筑摩書房、2013

● 成績評価方法

平常点70%（課題発表40% ディスカッション30%）、レポート30%

授業名: 比較文化社会特論**授業担当教員: 吉田達矢****●講義概要**

本講義では、日本列島の社会・文化・歴史との比較を念頭に、英語文献・論文の講読を通じて他地域の社会・文化・歴史について議論し、文化・社会・歴史とは何かを考える。具体的には、前半では、中東(オスマン帝国)の社会・文化・歴史に関する英語文献、後半ではトルコや中央ユーラシアと日本との文化交流に関する英語論文を講読し、重要な箇所は議論していく。

この講義は、本専攻のディプロマ・ポリシーのうち「②国際文化の諸課題に対して、一定の文化学理論を用いて分析・解釈する能力を身につける」ことを主な目的とする。

●学習到達目標

様々な地域の社会や文化や歴史に関する知識を身につけたうえで、それらの相違点や類似点を考察することができるようになる。

●講義計画

第1回: ガイダンス

第2回: 各テキストについての概要説明、第3回以降の準備

第3回: 『英文詳説世界史』の関連箇所を講読

第4回: *The Ottoman Empire A History*「Chapter 10」の講読

第5回: *The Ottoman Empire A History*「Chapter 11」の講読

第6回: *The Ottoman Empire A History*「Chapter 12」の講読

第7回: *The Ottoman Empire A History*「Chapter 13」の講読

第8回: *The Ottoman Empire A History*「Chapter 14」の講読

第9回: *The Ottoman Empire A History* 講読の総括、次回以降のテキストについての準備

第10回: *Modern Japanese Images about Turkey* の1章を講読

第11回: *Modern Japanese Images about Turkey* の2章を講読

第12回: *Modern Japanese Images about Turkey* の3章を講読

第13回: *Modern Japanese Images about Turkey* の4章を講読

第14回: *Modern Japanese Images about Turkey* 講読の総括、次回以降のテキストについての準備

第15回: *Japan on the Silk Road* のいずれか1章を講読

●事前事後学習

事前学習: テキストをあらかじめよく読み、専門・特殊用語についても参考資料などを参照して十分に調べて理解しておくこと。

事後学習: 不明な事柄について参考資料などを参照し、理解を深めておくこと。

●テキスト

橋場弦・岸本美緒・小松久男・水島司(監修)『英文詳説世界史』, 山川出版社, 2019.

Selçuk Esenbel(ed.), *Japan on the Silk Road: Encounters and Perspectives of Politics and Culture in Eurasia*, Brill: Leiden, Boston, 2018.

Nobuo Misawa(ed.), *Modern Japanese Images about Turkey: Proceedings of the International Symposium “the Formation of the Relationship between Modern Japanese and the Islamic World” Organized on December 9–10, 2023, at TOYO University (1)*, 東洋大学アジア文化研究所, 2024.

Gökhan Çetinsaya, *The Ottoman Empire A History*, İstanbul, 2022.

●参考資料

小笠原弘幸『オスマン帝国: 繁栄と衰亡の 600 年史』, 中公新書, 2018 年.

宮下遼『オスマン帝国全史: 「崇高なる国家」の物語 1299–1922』, 講談社現代新書, 2025 年.

イスラーム文化事典編集委員会(編)『イスラーム文化事典』, 丸善出版, 2023 年.

川北稔ほか(編)『歴史学事典』, 全 16 巻, 弘文堂, 1994～2009 年.

小松久男ほか(編)『中央ユーラシアを知る事典』, 平凡社, 2005 年.

鈴木董ほか(編)『中東・オリエン文化事典』, 丸善出版, 2020 年.

これら以外にも講義中に適宜紹介する。

●成績評価方法

平常点(70%)・期末レポート(30%)

●その他留意事項

学部卒業程度の世界史(日本史含む)の基本知識があること。

学部卒業程度の英語力(読解力)があること。

多文化共生特論

宮坂 清

● 講義概要

現代のグローバル化は、国境を越えた人の移動や文化の交流を活発化させる一方で、異なる文化的背景を持つ人々の共生をめぐる課題を生じさせている。本講義はそうした課題に対応するため、理論的な枠組みと実践的な事例を通じて多文化共生を理解することを目的とする。そして異文化や異なる社会的背景を持つ人々との共生をテーマとし、「よそ者／ストレンジャー」という概念を核に、多文化共生の理論的基盤と実践的アプローチを探究する。講義は3つのセクションに分かれる。第1セクションでは、ジンメル、シュッツ、バウマンといった社会学者や哲学者による「よそ者論」を体系的に学ぶ。第2セクションでは、日本の地域社会における具体的な事例を検討し共生の可能性を模索する。第3セクションでは、各国の移民政策を分析し、多文化共生を実現するための具体的な方策や課題に焦点を当てる。

● 学修到達目標

多文化共生に関する理論的枠組みを理解し、具体的事例や移民政策を通じて異文化間の共生の課題を分析し、実践的な解決策を提案できる能力を身につける。

● 講義計画

第1回 オリエンテーション

第2回 よそ者／ストレンジャー理論(1):ジンメルのよそ者論

第3回 よそ者／ストレンジャー理論(2):マージナル・マン論

第4回 よそ者／ストレンジャー理論(3):シュッツのよそ者論

第5回 よそ者／ストレンジャー理論(4):バウマンのストレンジャー論

第6回 よそ者／ストレンジャー理論(5):アーリのモビリティ論

第7回 日本における共生の実際(1):地域社会の多国籍化・多文化化への対応

第8回 日本における共生の実際(2):外国人住民に対する日本語教育

第9回 日本における共生の実際(3):外国からきた労働者

第10回 日本における共生の実際(4):外国人介護人材の受け入れ

第11回 日本における共生の実際(5):地域社会と宗教コミュニティ活動

第12回 各国の移民政策(1):日本の移民政策

第13回 各国の移民政策(2):韓国・中華民国の移民政策

第14回 各国の移民政策(3):ドイツ・カナダの移民政策

第15回 各国の移民政策(4):国際養子家族

● 事前事後学習

■ 事前学習

授業までにテキストを熟読する。本講義の方針に従ってテキストの要点をまとめ、また疑問点や議論すべき点を整理する。

■事後学習

授業で学んだことをまとめる。自身の研究にどのように活かせるかを考える。

● テキスト

徳田剛 2020, 『よそ者／ストレンジャーの社会学』晃洋書房。

徳田剛/二階堂裕子/魁生由美子編 2023, 『地方発 多文化共生のしくみづくり』

● 参考資料

必要に応じて配布する。

● 成績評価方法

授業での発言や貢献:60%、課題レポート 40%。

ジェンダー文化特論

佐伯 奈津子

● 講義概要

本講義は、性にまつわるさまざまな問題を、政治・社会・経済・歴史・文化・宗教などの観点から学ことで、ジェンダーをめぐる議論がどのように変化(発展)したのかを理解しようとするものである。

先天的・身体的・生物学的に個体が具有する性別(セックス)に対し、生物学的男性・女性にふさわしいと考えられている役割・思考・行動など社会的・文化的に形成された性別をジェンダーという。

性をめぐる理論化と運動のなかで、ジェンダーの観点が用いられるようになったのは、1960年代以降、国際的に展開された第二波フェミニズム(女性解放思想)においてである。それまでの女性の参政権や財産権を求める第一波フェミニズムに対し、第二波フェミニズムでは、家族という私的領域の問題としてあつかわれてきた問題こそが重要なのだと指摘された。

性をめぐる権力関係、性的分業、性と生殖に関する自己決定権、女性に対する暴力などの問題を認識・分析するため、ジェンダーの視点が取り入れられるようになり、さらに人種・階級・年齢など複数のアイデンティティを組み合わせる(インターセクショナリティ)ことで、差別や抑圧を明らかにしようとする第三波・第四波フェミニズムへとつながっている。

本講義では、ジェンダーと暴力に関する具体的な事例を取り上げながら、ジェンダー・ギャップ(男女格差)、差別や抑圧の実態と、それらをなくそうとする取り組みについて、ともに考えたい。

● 学修到達目標

- ・ジェンダーの視点を理解し、性にまつわる「あたりまえ」を問い直す姿勢を身につける。
- ・フェミニズムが女性解放にとどまらず、支配をなくし、人があるがままの自分で、平和に暮らせるよう解放されることをめざす理論と実践だと理解する。
- ・ジェンダー・ギャップを小さくするための解決策を提案し、行動に移す。

● 講義計画

第1週 オリエンテーション

第2週 World Gender Gap Report を読む① 中央アジア、東アジア・太平洋、ヨーロッパ

第3週 World Gender Gap Report を読む② ラテンアメリカ、中東・北アフリカ、北アメリカ

第4週 World Gender Gap Report を読む③ 南アジア、サブサハラ・アフリカ

第5週 宗教とジェンダー① イスラームは女性に抑圧的な宗教か

第6週 宗教とジェンダー② (院生の発表)キリスト教、仏教、神道

第7週 宗教とジェンダー③ (院生の発表)ヒンドゥー教、ユダヤ教

第8週 文化とジェンダー① 女性器切除か女子割礼か

第9週 文化とジェンダー② (院生の発表)

第10週 文化とジェンダー③ (院生の発表)

第11週 フェミニズムの歴史

第12週 ジェンダーを理解するキーワード① 家父長制、植民地主義

第13週 ジェンダーを理解するキーワード② マイクロ・アグレッション、インターセクショナリティ

第14週 (院生の発表)修士論文にジェンダーの視点を加える①

第15週 (院生の発表)修士論文にジェンダーの視点を加える②

● 事前事後学習

事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。

事後学習では、自身の研究テーマにひきつけて、論点を整理する。

● **テキスト**

受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。

● **参考資料**

ベル・フックス(2020)『フェミニズムはみんなのもの——情熱の政治学』エトセトラブックス

一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同(2019)『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた——あなたがあなたらしくいられるための29問』

加藤秀一(2017)『はじめてのジェンダー論』有斐閣

● **成績評価方法**

受講態度(発表・ディスカッション)70%、期末レポート30%

● **その他留意事項**

発表・ディスカッションに備えて、事前学習を十分におこなうこと。

宗教・思想・文化特論

神山 美奈子

● 講義概要

本講義は、本学の建学の精神である「敬神愛人」を深く学び、その背景にある聖書の基本的な知識(キリスト教の神、聖書、礼拝、祈り、信条、死生観、フェミニズム、人権問題や多様性の捉え方など)について学びます。聖書を読み、その時代背景や思想的背景を知った上で疑問に思うことを共有し、聖書が何を語ろうとしているのかを共に考えます。

● 学修到達目標

キリスト教の基本的な知識を習得し、宗教間対話、宗教思想、宗教における平和について理解することができる。

● 講義計画

- 第1回 ガイダンス:宗教(キリスト教)を学ぶ意義
- 第2回 建学の精神を学ぶ:「神」と「敬神」
- 第3回 建学の精神を学ぶ:「愛」と「隣人愛」
- 第4回 建学の精神を学ぶ:創立者と思想
- 第5回 聖書に関する基本的な知識
- 第6回 讃美歌とキリスト教会
- 第7回 礼拝と祈り
- 第8回 信条、洗礼、聖餐
- 第9回 中間確認レポート
- 第10回 発表 イエスの生涯:クリスマス(降誕)
- 第11回 発表 イエスの生涯:十字架(贖罪)
- 第12回 発表 イエスの生涯:イースター(復活)
- 第13回 発表 イエスの生涯:ペンテコステ(弟子)
- 第14回 宗教間対話と平和思想
- 第15回 授業総括

● 事前事後学習

- ①教科書である「聖書」に親しみを持つためにも聖書をよく読むこと。受講前には該当箇所を目を通し、受講後には学んだ部分を再度読み返すこと。
- ②毎週火曜日・木曜日に行われるチャペルアワー出席、その他クリスマス礼拝など特別な礼拝に積極的に出席すること。

● テキスト

『聖書(新共同訳)』日本聖書協会(翻訳は口語訳や協会共同訳でも良い)

● 参考資料

- 『現代を生きるキリスト教-もうひとつの道から』芦名定道・土井健司・辻学、教文館、2012年
- 『現代神学の冒険』芦名定道、信教出版社、2020年
- 『キリスト教って何なんだ?』上馬キリスト教会ツイッター部、ダイヤモンド社、2022年(第3刷)
- 『メソジストって何ですか-ウェスレーが私たちに訴えること』清水光雄、教文館、2007年

● 成績評価方法

講義への主体的参加、発表、発言 60点、期末レポート 40点

● その他留意事項

なし

研究方法論

佐竹 眞明

● 講義概要

国際文化協力専攻の修士課程に入学した諸君は所定の授業を履修し、さらに、修士論文を執筆しなければならない。共通科目、国際文化、国際文化協力の分野において、学問を深め、自分の関心に基づいて修士論文を執筆する。このように、学部を修了した諸君は専門の研究に入っていくこととなる。

この授業では研究のスタートにたった諸君が修士論文を執筆するために身につけなければならない思考方法、倫理などについて、検討していく。独自の思考に基づき、独創性を持ち、説得力を持ち、論文を組み立てる必要がある。今年度は梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』（高管出版、2013）を用いながら、研究姿勢、思考方法、論文作成の方法を学習していく。また、受講生に研究計画を報告してもらい、研究方法上の助言を提供する。

● 学修到達目標

- ・受講生は自分の研究の意義、目的を説明できることができる。
- ・受講生は研究方法の基礎を習得する。
- ・受講生は修士論文を執筆する基本的な方法を習得する。

● 事前事後学習

教科書『研究ってなんだろう』の「はじめに」を読んでおいてください。

● 講義計画

- 第1回 プロローグ 自己紹介 授業の進め方説明
- 第2回 テキスト第1章 研究について考えよう—準備編 1節 研究って何だろう
- 第3回 2節 研究の全体像をつかもう
- 第4回 3節 研究を始めるために準備しよう
- 第5回 第2章 研究を進めよう—実践編 1節 研究テーマを決める
- 第6回 2節 先行研究のレビュー
- 第7回 3節 研究計画を立てる
- 第8回 同
- 第9回 受講生による研究計画 発表
- 第10回 同
- 第11回 4節 調査の実施
- 第12回 5節 分析・考察
- 第13回 6節 論文としてまとめる
- 第14回 7節 実践につなげる
- 第15回 これから

● テキスト

梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013) 定価本体 1500 円＋税 丸善にて購入し、授業初回に持参すること。

参考書

井下千以子『思考を鍛える大学の学び入門』、慶応義塾大学出版会、2021

● **成績評価方法**

授業への参加度を重視する。レポート。

国際文化協力特別研究Ⅰ（日本歴史・文化）

鹿毛 敏夫

● 演習概要（研究テーマ：日本の歴史・文化の研究）

日本の歴史の展開過程を総合的に考察するとともに、特に日本史特有の「武家社会」の特質を取りあげて、その文化的背景とともに合理的に理解する。また、歴史文学作品を講読して、その正確な内容理解に努めるとともに、史実に沿った批判的考察を進め、時代の認識や捉え方について議論を深める。演習を通して、論理的思考力を培い、みずから史料を分析・考察して歴史研究を進める技術と能力を高める。

● 学修到達目標

日本史の史的展開過程における「武家」の時代の特質を理解するとともに、日本の歴史と文化への関心を深め、先行研究を踏まえながら自身の論文執筆への明確な意識を獲得することを目標とする。

● 演習計画

前期)	後期)
第 1-2 回 日本史研究の対象	第 1-2 回 文献講読⑤「交易」
第 3-4 回 時代の変遷と特徴	第 3-4 回 文献講読⑥「異宗教」
第 5-6 回 武家社会の特質	第 5-6 回 文献講読⑦「水軍」
第 7-8 回 文学から史実を読み取る	第 7-8 回 文献講読⑧「京都」
第 9-10 回 文献講読①「武士」	第 9-10 回 文献講読⑨「豪商」
第 11-12 回 文献講読②「戦国」	第 11-12 回 文献講読⑩「九州」
第 13-14 回 文献講読③「南蛮」	第 13-14 回 日本の歴史・文化の特質
第 15 回 文献講読④「異文化」	第 15 回 演習の総括

● 事前事後学習

テキストを事前に講読し、不分明な歴史事象について調べておくとともに、毎回の講義で学習した内容を復習し、再確認しておく必要がある。

● テキスト

安部龍太郎著『宗麟の海』NHK出版、2017 年

● 参考資料

村井章介著『世界史のなかの戦国日本』筑摩書房、2012 年

鹿毛敏夫著『大航海時代のアジアと大友宗麟』海鳥社、2013 年

静永健編『東アジア海域に漕ぎだす 6 海がはぐくむ日本文化』東京大学出版会、2014 年

● 成績評価方法

授業時の発表・討議と課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ（平和・ジェンダー・文化）

佐伯 奈津子

● 講義概要

本研究では、修士論文作成に向け、学生自身の関心を明確にし、研究計画を立てることをめざす。前期は、研究テーマの設定、仮説の設定、調査方法（文献資料の渉猟、アンケート調査、聞き取り調査など）、研究倫理について学んだうえで、学生の関心に沿って、先行研究のレビューをおこなう。そのうえで、後期は、研究の背景、研究の意義（特色）、研究の方法など、研究計画を立てながら、修士論文の構成を検討する。

● 学修到達目標

- ・研究方法を学び、研究計画を立てることができる。
- ・自身の研究の意義や目的を説明することができる。

● 講義計画

（前期）

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究テーマの設定
- 第3回 調査方法（文献資料の渉猟）
- 第4回 調査方法（アンケート調査）
- 第5回 調査方法（聞き取り調査）
- 第6回 研究にあたっての心構え
- 第7回 先行研究レビュー①
- 第8回 先行研究レビュー②
- 第9回 先行研究レビュー③
- 第10回 先行研究レビュー④
- 第11回 先行研究レビュー⑤
- 第12回 先行研究レビュー⑥
- 第13回 先行研究レビュー⑦
- 第14回 先行研究レビュー⑧
- 第15回 まとめ

（後期）

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 先行研究レビュー⑨
- 第3回 先行研究レビュー⑩
- 第4回 先行研究レビュー⑪
- 第5回 先行研究レビュー⑫
- 第6回 先行研究レビュー⑬
- 第7回 先行研究レビュー⑭
- 第8回 研究計画を立てる（研究の学術的背景）
- 第9回 研究計画を立てる（研究の目的、独自性、創造性）
- 第10回 研究計画を立てる（研究の着想にいたった経緯）
- 第11回 研究計画を立てる（研究の位置づけ）

第12回 研究計画を立てる(研究でなにを明らかにするのか)

第13回 修士論文の構成を考える①

第14回 修士論文の構成を考える②

第15回 まとめ

● **事前事後学習**

事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。

事後学習では、自身の研究テーマにひきつけて、論点を整理する。

● **テキスト**

受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。

● **参考資料**

受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。

● **成績評価方法**

受講態度(発表・ディスカッション)において総合的に評価する

授業科目名(Course Title) : 国際文化協力特別研究 I (国際移民・文化)**授業担当教員(Your Name) 佐竹真明****● 講義概要(目的と内容・方法)(Course Description)**

本研究では、修士論文作成に向けて、学生自身の関心を明確にし、研究計画を立てることをめざす。特に国際移民・文化を題材に修士論文を執筆するための基礎論文を書く準備を行う。

● 学修到達目標(Aims) 《必須項目》

研究方法を学び、研究計画を立てることができる。自身の研究の持つ意義や目的を説明することができる。前期は、研究テーマの設定、仮説の設定、調査方法(文献資料の収集、アンケート調査、聞き取り調査など)、研究倫理についてまず学ぶ。学生の関心に沿って、先行研究のレビューをおこなう。そのうえで、後期は、研究の背景、研究の意義(特色)、研究の方法など、研究計画を立てながら、修士論文の構成を検討する。修士論文の基礎となる論文を作成する。

● 講義計画(Course Schedule) 《必須項目》**(前期)**

第1回 オリエンテーション

第2回 研究にあたっての心構え

第3回 研究テーマの設定

第4回 調査方法(文献資料の収集)

第5回 調査方法(アンケート調査)

第6回 調査方法(聞き取り調査)

第7回 先行・関連研究レビュー①

第8回 先行・関連研究レビュー②

第9回 先行・関連研究レビュー③

第10回 先行・関連研究レビュー④

第11回 先行・関連研究レビュー⑤

第12回 先行・関連研究と自分の関心 ①

第13回 先行・関連研究と自分の関心②

第14回 先行・関連研究と自分の関心③

第15回 まとめ

(後期)

第1回 オリエンテーション

第2回 先行・関連研究レビュー⑥

第3回 先行・関連研究レビュー⑦

第4回 先行・関連研究レビュー⑧

第5回 研究計画を立てる(研究の学術的背景)

第6回 研究計画を立てる(研究の着想にいたった経緯)

第7回 研究計画を立てる(研究の位置づけ)

第8回 研究計画を立てる(研究の目的、独自性、創造性)

第9回 第12回 研究計画を立てる(研究でなにを明らかにするのか)

第10回 修士論文の構成を考える①

第11回 修士論文の構成を考える②

第13回 予備論文の執筆①

第14回 予備論文の執筆

第15回 まとめ

※4 単位科目は30回分記載

- **事前事後学習(Preparation & Review)《必須項目》**事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。事後学習では、自身の研究テーマにひきつけて、論点を整理する。
- **テキスト(Required Textbooks)** 受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。
- **参考資料(References)** 受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。
- **成績評価方法(Evaluation)《必須項目》**受講態度(発表・ディスカッション)において総合

的に評価する

● その他留意事項(Other Matters)

国際文化協力特別研究Ⅰ（人間行動・文化）

柴崎全弘

●演習概要

人間の心（思考、感情）や行動には全人類に共通して見られるものも存在するが、その一方で特定の文化圏あるいは特定の時代の文化にしか見られないものも存在する。本演習では人間の行動に影響を及ぼす要因として「文化」を見つめ直し、社会心理学、文化心理学、進化心理学の各領域における先行研究を参照しながら人間行動の普遍性と文化差について考察する。それと並行して研究計画を立案し、必要な調査・実験を進めていく。

●学修到達目標

先行研究のレビューを通して問いの立て方、調査方法、データの分析手法等について学び、修士論文を書くために必要なスキルを身に付ける。

●講義計画

（前期）

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 研究テーマの設定①
- 第3回 研究テーマの設定②
- 第4回 研究方法の検討①
- 第5回 研究方法の検討②
- 第6回 先行研究のレビュー①
- 第7回 先行研究のレビュー②
- 第8回 先行研究のレビュー③
- 第9回 先行研究のレビュー④
- 第10回 先行研究のレビュー⑤
- 第11回 先行研究のレビュー⑥
- 第12回 先行研究のレビュー⑦
- 第13回 先行研究のレビュー⑧
- 第14回 先行研究のレビュー⑨
- 第15回 今後の研究方針の確認

（後期）

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 研究計画の検討①
- 第3回 研究計画の検討②
- 第4回 先行研究のレビュー①

- 第 5 回 先行研究のレビュー②
- 第 6 回 先行研究のレビュー③
- 第 7 回 先行研究のレビュー④
- 第 8 回 先行研究のレビュー⑤
- 第 9 回 先行研究のレビュー⑥
- 第 10 回 先行研究のレビュー⑦
- 第 11 回 先行研究のレビュー⑧
- 第 12 回 先行研究のレビュー⑨
- 第 13 回 研究計画の再検討①
- 第 14 回 研究計画の再検討②
- 第 15 回 まとめ・期末レポートの提出

- 事前事後学習

事前に指定した論文を読み込み、討議に備える。演習後は感想や疑問点をノートにまとめておく。

- テキスト

毎回、読むべき論文を配布する。

- 参考資料

授業内で適宜紹介する。

- 成績評価方法

演習時の発表・討議と期末レポートで評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ（国際政治・文化）

増田 あゆみ

● 演習概要（研究テーマ：国際政治学研究）

本研究は、国際政治学を主とし、国際社会における現象を政治学の視座で、分析し、考察することを主たる目的とする。

研究の前半では、国際政治学の基本を基本的文献の講読、および議論をすることによって、熟知することに務める。研究の手法についても、この基本の修得に沿って、順次、研究テーマの設定、研究の方法論の検討等を考察していく。研究の後半においては、個々の受講生の研究テーマの設定、および、研究の経過報告を中心に、受講生間での議論を中心に、修士論文の指導を行う。

● 学修到達目標

受講生の研究テーマに基づいた実証的な研究を積み上げることができるようになること。

● 演習計画

前期

- 1) 国際政治学について
- 2) 研究テーマの設定について
- 3) 報告と議論
- 4) 指導
- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 報告と議論
- 8) 指導
- 9) 報告と議論
- 10) 指導
- 11) 報告と議論
- 12) 指導
- 13) 研究テーマの検討
- 14) 研究テーマの検討
- 15) 総括

後期

- 1) 研究テーマの確認
- 2) 報告と議論
- 3) 指導
- 4) 研究テーマの確認
- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 研究テーマの確認
- 8) 報告と議論
- 9) 指導
- 10) 研究テーマの確認
- 11) 報告と議論
- 12) 指導
- 13) 研究テーマの再検討
- 14) 指導
- 15) 総括

● 事前事後学習

事前においては、毎回の講義時に使用する文献の予習、事後においては、講義内容の復習を行うこと。

● テキスト

『国際関係論入門：思考の作法』 初瀬隆平編著、法律文化社 2012年

● 参考資料

適宜、指示する。

● 成績評価方法

受講態度および修士論文において総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ(国際・宗教・文化)

宮坂 清

● 演習概要(研究テーマ:国際文化、宗教)

本演習は、宗教人類学および宗教社会学の理論と方法に基づき、地域社会における宗教文化を分析し、修士論文の一部としてまとめることを目的とする。儀礼、信仰、宗教組織、社会運動などを対象に、宗教的実践が社会関係や価値観の形成に与える影響を分析する。研究計画の設定、先行研究の読み込み、自身による調査の立案・実施・分析を中心とする。

● 学修到達目標

文献研究と実証的調査を往還させながら研究計画を精緻化し、論理構成と学術的表現の向上を図り、完成度の高い論文執筆を目指す。

● 講義計画

前期)

- 第 1-2 回 到達目標の共有
- 第 3-4 回 研究計画の設定
- 第 5-6 回 先行研究の探索
- 第 7-8 回 先行研究の精読
- 第 9-10 回 中間報告と方法論設計
- 第 11-12 回 先行研究の検討
- 第 13-14 回 先行研究の考察
- 第 15 回 総括

後期)

- 第 1-2 回 研究課題の再検討
- 第 3-4 回 調査計画の立案
- 第 5-6 回 調査対象の検討
- 第 7-8 回 調査方法の検討
- 第 9-10 回 中間報告と方法論設計
- 第 11-12 回 調査報告
- 第 13-14 回 データの分析
- 第 15 回 総括

● 事前事後学習

事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。調査で得たデータをまとめる。

事後学習では、学んだことを整理し、自分の研究計画とすり合わせる。

● テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業時に提示する。

- 参考資料

必要に応じて提示する。

- 成績評価方法

授業時の発表・討議、課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ(日本史・文化)

C. M. メイヨー

● Course Overview 講義概要

日本の前近代から現代に至る文化史の概要を把握し、歴史を描いた視覚媒体(視覚史料)を主たる対象として、内容読解にとどまらず、享受の様相も踏まえた多角的分析を行うことを目的とする。史料を深く考察するための論理的思考力を養い、専門的知識と方法論を修得することで、広い視野に立った歴史理解を身につける。さらに、修士論文作成に向けて、書評(研究文献レビュー)を通して研究手法を学ぶ。前期はテーマ設定と課題の絞り込みのため、関連論文の精読と発表を行い、後期は資料収集と分析を進め、その成果を逐次報告する。

● Learning Objectives 学習到達目標

文化史に関する視覚史料および先行研究を踏まえて史料を読み解き、適切な分析を通して妥当な結論を導き、論理的な構成を備えた研究報告や論文としてまとめ上げる力を養うことを目標とする。

● Lecture Plan 講義計画

前期)

1. 開講ガイダンス(到達目標、進め方、発表と書評の要件)
2. 日本文化史の射程整理(前近代～近現代)と「視覚史料」とは何か
3. 視覚史料の種類と特性(絵巻、絵画、版画、写真、映像、展示など)
4. 視覚史料の史料批判①(制作背景、作者や依頼主、目的、機能)
5. 視覚史料の史料批判②(流通、複製、保存、改変、バージョン差)
6. 分析枠組み①(受容と享受の分析:誰が、どこで、どう見たか)
7. 分析枠組み③(メディア史:媒体が意味を変える)
8. ケーススタディ演習①(前近代:絵巻、縁起、合戦絵などの読解)
9. ケーススタディ演習②(近世:浮世絵、名所図会、瓦版などの読解)
10. ケーススタディ演習③(近代:写真、雑誌、博覧会などの視覚史料)
11. ケーススタディ演習④(現代:映画、TV、デジタル表象と歴史叙述)
12. 研究テーマ設計①(問いの立て方、対象史料群の決め方、射程の絞り込み)
13. 研究テーマ設計②(「内容分析」+「受容分析」を両立させる設計)
14. 研究テーマ設計③(先行研究との接続:何が新規性になるか)
15. 総括

後期)

1. 開講ガイダンス(到達目標、進め方、発表と書評の要件)
2. 先行研究精読と発表①(関連論文の批判的読解:主張、方法、根拠)
3. 先行研究精読と発表②(比較、対立する議論の整理)
4. 書評(研究文献レビュー)の技法①(論証構造の可視化、要約の型)
5. 書評(研究文献レビュー)の技法②(評価軸:方法、史料、射程、限界)
6. 研究方法ワークショップ①(分析手順:再現可能な手順へ)

7. 研究方法ワークショップ②(資料探索:アーカイブとデータベース)
8. 研究方法ワークショップ③(デジタル実習:IIIF+注釈で視覚史料を比較・分析)
9. 研究方法ワークショップ④(図版利用の作法:引用、著作権、倫理、図版キャプション)
10. 調査研究:進捗報告と討論①(史料収集の現状とコーパス確定)
11. 調査研究:進捗報告と討論②(試験分析:1点深掘り+周辺比較)
12. 調査研究:進捗報告と討論③(受容データの扱い:観客、読者、展示、流通)
13. 調査研究 進捗報告と討論④(反証可能性と別解釈への応答の準備)
14. 論文スキルの理論と実践(構成設計:問い→方法→分析→結論の整合)
15. 総括

● Class Preparation and Review 事前事後学習

- ・事前学習として、オンラインで配布する授業用スライドに目を通し、疑問点や自分なりの見解を整理したうえで授業に臨むこと。また、授業内容に関連する最新ニュースに日頃から触れる習慣をつけること。(所要時間 15 分程度)
- ・事後学習として、毎回の講義終了後、忘れないうちに授業の流れや要点を再現できるよう、講義ノートを整理事務すること。(所要時間 15 分程度)

● Textbook テキスト

教科書は指定しない。

● Reference Materials 参考資料

必要に応じて授業時に適宜紹介したり、配布したりする。

● Other Notes その他留意事項

- ・授業は日本語で行われる。
- ・本講義はアクティブ・ラーニング(学生参加型)形式で進められるため、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションを取り入れながら学びを深めていく。
- ・受講にあたって、必ず配布物とノートを用意すること。授業中は要点を整理しながらノートを取り、次の授業に備えて予習と復習を行うこと。
- ・すべての授業に遅刻せず出席することが求められる。
- ・毎回リアクションペーパーの提出を求め、提出されたリアクションペーパーに対するフィードバックは次の授業時に行う。

● Evaluation Method 評価方法

授業時の発表、ディスカッション、課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ（日本歴史・文化）

鹿毛 敏夫

● 演習概要（研究テーマ：日本の歴史・文化の研究）

日本の歴史の展開過程を総合的に考察し、その文化的背景とともに合理的に理解する。また、史実に沿った批判的考察を進め、時代の認識や捉え方について議論を深める。演習を通して、論理的思考を深め、みずから史料を分析・考察して歴史研究を進め、その成果を修士論文としてまとめる。

● 学修到達目標

日本の歴史と文化に関する先行研究を踏まえ、論理的思考を積み上げて、自身の修士論文を執筆・完成させることを目標とする。

● 演習計画

前期)

第 1-2 回 研究主題の策定

第 3-4 回 研究の構想

第 5-6 回 研究課題の抽出

第 7-8 回 先行研究の批判的考察①

第 9-10 回 先行研究の批判的考察②

第 11-12 回 先行研究の批判的考察③

第 13-14 回 史料の読み込みと解釈①

第 15 回 史料の読み込みと解釈②

後期)

第 1-2 回 史料の読み込みと解釈③

第 3-4 回 史料の位置づけと評価①

第 5-6 回 史料の位置づけと評価②

第 7-8 回 史料群の有機的結び付け①

第 9-10 回 史料群の有機的結び付け②

第 11-12 回 論理的思考の展開

第 13-14 回 著述の修正と加筆

第 15 回 研究の総括

● 事前事後学習

先行研究を事前に講読して問題点を抽出し、論証に必要な歴史史料を熟読して解釈・評価しておく必要がある。事後には、成果と課題を整理し、論証過程を文章化しておく必要がある。

● テキスト

適宜提示する。

● 参考資料

佐藤信編『古代史講義』筑摩書房、2018 年

高橋典幸・五味文彦編『中世史講義』筑摩書房、2019 年

● 成績評価方法

授業時の発表・討議と修士論文で総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ（平和・ジェンダー・文化）

佐伯 奈津子

● 講義概要

本研究では、「国際文化協力特別研究Ⅰ（平和・ジェンダー・文化）」につづいて、修士論文作成のための演習をおこなう。前期は、特別研究Ⅰで立てた研究計画、論文の構成にしたがい、実際に修士論文を執筆しはじめる。執筆によって必要だと判明した先行研究レビューをつづける。後期は、執筆した修士論文を推敲し、完成させる。

● 学修到達目標

- ・自身の研究の意義や目的を説明することができる。
- ・独自性、創造性のある修士論文を完成させる。

● 講義計画

（前期）

第1回 オリエンテーション

第2回 修士論文の執筆と先行研究レビュー①

第3回 修士論文の執筆と先行研究レビュー②

第4回 修士論文の執筆と先行研究レビュー③

第5回 修士論文の執筆と先行研究レビュー④

第6回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑤

第7回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑥

第8回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑦

第9回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑧

第10回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑨

第11回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑩

第12回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑪

第13回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑫

第14回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑬

第15回 まとめ

（後期）

第1回 オリエンテーション

第2回 修士論文の推敲①

第3回 修士論文の推敲②

第4回 修士論文の推敲③

第5回 修士論文の推敲④

第6回 修士論文の推敲⑤

第7回 修士論文の推敲⑥

第8回 修士論文の推敲⑦

第9回 修士論文の推敲⑧

第10回 修士論文の推敲⑨

第11回 修士論文の推敲⑩

第12回 修士論文の推敲⑪

第13回 修士論文の推敲⑫

第14回 修士論文の推敲⑬

第15回 まとめ

● **事前事後学習**

事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。

事後学習では、自身の研究テーマにひきつけて、論点を整理する。

● **テキスト**

受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。

● **参考資料**

受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。

● **成績評価方法**

受講態度(発表・ディスカッション)および修士論文において総合的に評価する

授業科目名(Course Title) : 国際文化協力特別研究 I (国際移民・文化)

授業担当教員(Your Name) 佐竹真明

● **講義概要(目的と内容・方法)(Course Description)**

本研究では、「国際文化協力特別研究 I (国際移民・文化)」につづけて、修士論文作成のための演習をおこなう。前期は、特別研究 I で立てた研究計画、論文の構成にしたがい、実際に修士論文を執筆しはじめる。執筆によって必要だと判明した先行・関連研究レビューをつづける。後期は、執筆した修士論文を推敲し、完成させる。

● **学修到達目標**

- ・自身の研究の意義や目的を説明することができる。
- ・独自性、創造性のある修士論文を完成させる。

● **講義計画**

(前期) 第1回 オリエンテーション

第2回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー①

第3回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー②

第4回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー③

第5回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー④

第6回 修士論文の執筆と先行研究レビュー⑤

第7回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー⑥

第8回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー⑦

第9回 修士論文の執筆と先行・関連研究レビュー⑧

第10回 修士論文の執筆（論文構成の見直し）①

第11回 修士論文の執筆（論文構成の見直し）②

第12回 修士論文の執筆（論文構成の見直し）③

第13回 修士論文の執筆（論文構成の見直し）④

第14回 修士論文の執筆（構成の見直し）⑤

第15回 まとめ

（後期） 第1回 オリエンテーション

第2回 修士論文の推敲①

第3回 修士論文の推敲②

第4回 修士論文の推敲③

第5回 修士論文の推敲④

第6回 修士論文の推敲⑤

第7回 修士論文の推敲⑥

第8回 修士論文の推敲⑦

第9回 修士論文の推敲⑧

第10回 修士論文の推敲⑨

第11回 修士論文の推敲⑩

第12回 修士論文の推敲⑪

第13回 修士論文の推敲⑫

第14回 修士論文の推敲⑬

第15回 まとめ

- 事前事後学習 事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。 事後学習では、自身の研究テーマにひきつけて、論点を整理する。
- テキスト 受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。
- 参考資料 受講生の研究テーマに応じて、講義時に提示する。
- 成績評価方法 受講態度（発表・ディスカッション）および修士論文において総合的に評価する

国際文化協力特別研究Ⅱ（人間行動・文化）

柴崎全弘

●演習概要

本演習では人間の行動に影響を及ぼす要因として「文化」を見つめ直し、社会心理学、文化心理学、進化心理学の各領域における先行研究を参照しながら人間行動の普遍性と文化差について考察する。それと並行して修士論文の構成を考え、必要に応じて追加調査等を実施しながら執筆を進めていく。

●学修到達目標

先行研究のレビューを通して問いの立て方、調査方法、分析手法等について学び、データを集めて分析しながら独自性のある修士論文を完成させる。

●講義計画

（前期）

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 研究テーマの確認
- 第3回 研究方法の確認
- 第4回 分析方法の確認
- 第5回 論文構成の確認
- 第6回 先行研究のレビュー①
- 第7回 先行研究のレビュー②
- 第8回 先行研究のレビュー③
- 第9回 先行研究のレビュー④
- 第10回 先行研究のレビュー⑤
- 第11回 先行研究のレビュー⑥
- 第12回 先行研究のレビュー⑦
- 第13回 先行研究のレビュー⑧
- 第14回 先行研究のレビュー⑨
- 第15回 執筆計画の確認

（後期）

- 第1回 イン트로ダクション
- 第2回 論文指導①
- 第3回 論文指導②
- 第4回 論文指導③
- 第5回 論文指導④

- 第 6 回 論文指導⑤
- 第 7 回 論文指導⑥
- 第 8 回 論文指導⑦
- 第 9 回 論文指導⑧
- 第 10 回 論文指導⑨
- 第 11 回 論文指導⑩
- 第 12 回 論文指導⑪
- 第 13 回 論文指導⑫
- 第 14 回 論文指導⑬
- 第 15 回 まとめ・修士論文の提出

- 事前事後学習

事前に指定した論文を読み込み、討議に備える。演習後は感想や疑問点をノートにまとめておく。

- テキスト

毎回、読むべき論文を配布する。

- 参考資料

授業内で適宜紹介する。

- 成績評価方法

演習時の発表・討議と修士論文で評価する。

国際文化協力特別研Ⅱ（国際政治・文化）

増田 あゆみ

● 演習概要（研究テーマ：国際政治学研究）

本研究は、国際政治学を主とし、国際社会における現象を政治学の視座で、分析し、考察することを主たる目的とする。

研究の前半では、修士論文の方針の確認と研究テーマの考察を議論をすることによって、検討を重ねていくことにつとめる。研究の後半においては、個々の受講生の研究テーマの再確認と完成に受けた研究報告を中心に、受講生間での議論を中心に、修士論文の完成へ向ける指導を行う。

● 学修到達目標

受講生の研究テーマに基づいた実証的な研究を積み上げることができるようになること。

● 演習計画

前期

- 1) 修士課程後期における方針について
- 2) 研究テーマの再検討
- 3) 報告と議論
- 4) 指導
- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 報告と議論
- 8) 指導
- 9) 報告と議論
- 10) 指導
- 11) 報告と議論
- 12) 指導
- 13) 研究テーマの考察
- 14) 研究テーマの考察
- 15) 総括

後期

- 1) 研究テーマの考察
- 2) 報告と議論
- 3) 指導
- 4) 研究テーマの考察
- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 研究テーマの完成
- 8) 報告と議論
- 9) 指導
- 10) 研究テーマの完成
- 11) 報告と議論
- 12) 指導
- 13) 研究テーマの再検討
- 14) 指導
- 15) 総括

● 事前事後学習

事前においては、毎回の講義時に報告する文書の予習、事後においては、講義の復習を行うこと。

● テキスト

『国際関係論入門：思考の作法』 初瀬隆平編著、法律文化社 2012年

● 参考資料

適宜、指示する。

● 成績評価方法

受講態度および修士論文において総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ(国際・宗教・文化)

宮坂 清

● 演習概要(研究テーマ:国際文化、宗教)

本演習は、宗教人類学および宗教社会学の理論と方法に基づき、国際社会における宗教文化を分析し、修士論文としてまとめることを目的とする。地域社会に根ざした宗教実践や信仰表象が、国際的な政治、経済、制度的枠組みとどのように関係しているのかを検討する。追加調査の立案と実施、先行研究の再検討、そして論文の執筆へと進めていく。

● 学修到達目標

文献研究と実証的調査を往還させながら研究計画を精緻化し、論理構成と学術的表現の向上を図り、完成度の高い論文執筆を目指す。

● 講義計画

前期)

- 第 1-2 回 研究課題の再検討
- 第 3-4 回 追加調査の立案
- 第 5-6 回 追加調査対象の設定
- 第 7-8 回 追加調査の報告と検討
- 第 9-10 回 論文の構成と先行研究の再考
- 第 11-12 回 先行研究の再検討
- 第 13-14 回 先行研究と研究課題の接続
- 第 15 回 総括

後期)

- 第 1-2 回 研究課題の再検討
- 第 3-4 回 調査データの見直し
- 第 5-6 回 先行研究から調査データをみる
- 第 7-8 回 調査データの提示法
- 第 9-10 回 先行研究と研究課題の接続
- 第 11-12 回 草稿の執筆と検討
- 第 13-14 回 修正と加筆
- 第 15 回 総括

● 事前事後学習

事前学習では、テキストを読み、概要・疑問点をまとめる。調査で得たデータをまとめる。
事後学習では、学んだことを整理し、自分の研究計画とすり合わせる。

● テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業時に提示する。

- 参考資料

必要に応じて提示する。

- 成績評価方法

授業時の発表・討議、課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ(日本史・文化)

C. M. メイヤー

● Course Overview 講義概要

「国際文化協力特別研究Ⅱ」は「国際文化協力特別研究Ⅰ」を踏まえた発展科目として位置づけられる。日本文化史を対象に、歴史を描いた視覚媒体(視覚史料)を中心に、内容の読解にとどまらず、享受の様相も踏まえた多角的な分析を行うことを目的とする。史料を深く考察するための論理的思考力を養い、専門的知識と方法論を修得することで、広い視野に立った歴史理解を身につける。さらに、演習を通して、自ら収集と分析した史料にもとづく研究成果を修士論文としてまとめる。後期は、特に修士論文の完成に向けた論文指導を集中的に進めていく。

● Learning Objectives 学習到達目標

確立した研究計画に基づき、史料と先行研究を統合して論証を展開し、妥当な結論を導く。さらに、研究を論理的構成を備えた修士論文として完成させ、研究内容を口頭発表と質疑応答により明確に説明できる力を養う。

● Lecture Plan 講義計画

前期)

1. ガイダンス
2. 研究計画の再点検
3. コーパス再確認と史料群の位置づけ
4. 主要史料の精査①(
5. 主要史料の精査②
6. 修士論文の執筆と先行研究レビュー①
7. 修士論文の執筆と先行研究レビュー②
8. 修士論文の執筆と先行研究レビュー③
9. 論証の骨格づくり①
10. 論証の骨格づくり②(
11. 章草稿ワークショップ①
12. 章草稿ワークショップ②
13. 中間発表
14. 中間発表へのフィードバック反映(改稿計画・後期の執筆計画確定)
15. 総括

後期)

1. ガイダンス
2. 草稿提出と相互査読①(理論と方法:論証と構成の点検)
3. 草稿提出と相互査読②(分析:史料読解の妥当性と比較の有効性)
4. 草稿提出と相互査読③(分析:史料読解の妥当性と比較の有効性)
5. 草稿提出と相互査読④(結論:新規性、貢献、限界、今後の課題)

6. 推敲技法①(図版配置の最適化)
7. 推敲技法②(引用、注、参考文献の統一など出典表記の最終確認)
8. 口頭発表訓練①(要旨作成:研究の要点を5分・10分で説明する)
9. 口頭発表訓練②(質疑応答:想定質問と回答の準備、弱点の補強)
10. 最終発表①(草稿完成版の報告:主張、根拠、結論)
11. 最終発表②(討論:代替解釈、反証、追加資料の可能性)
12. 最終改稿計画(修正の実行計画)
13. 原稿最終確認①(全体の整合:序論と結論、章間のつながり)
14. 原稿最終確認②(体裁、誤字脱字、図版、注、参考文献の最終点検)
15. 総括

● Class Preparation and Review 事前事後学習

- ・事前学習として、オンラインで配布する授業用スライドに目を通し、疑問点や自分なりの見解を整理したうえで授業に臨むこと。また、授業内容に関連する最新ニュースに日頃から触れる習慣をつけること。(所要時間 15 分程度)
- ・事後学習として、毎回の講義終了後、忘れないうちに授業の流れや要点を再現できるよう、講義ノートを整理事ること。(所要時間 15 分程度)

● Textbook テキスト

教科書は指定しない。

● Reference Materials 参考資料

必要に応じて授業時に紹介する。

● Other Notes その他留意事項

- ・授業は日本語で行われる。
- ・本講義はアクティブ・ラーニング(学生参加型)形式で進められるため、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションを取り入れながら学びを深めていく。
- ・受講にあたって、必ず配布物とノートを用意すること。授業中は要点を整理しながらノートを取り、次回の授業に備えて予習と復習を行うこと。
- ・すべての授業に遅刻せず出席することが求められる。
- ・毎回リアクションペーパーの提出を求め、提出されたリアクションペーパーに対するフィードバックは次回の授業時に行う。

● Evaluation Method 評価方法

授業時の発表、ディスカッション、修士論文で総合的に評価する。